

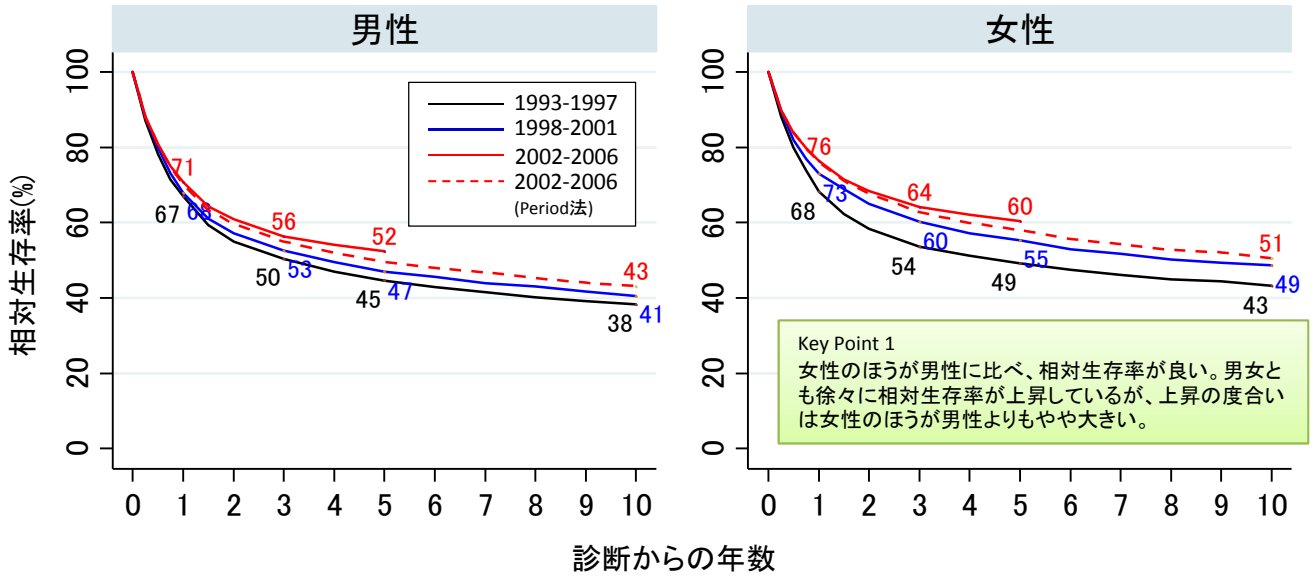
# 悪性リンパ腫

(ICD10: C81-85, C96 ICD-O-M: 9590-9729, 9750-9759)

治癒モデルの推定結果が不安定であったため、治癒モデルの結果を示していない

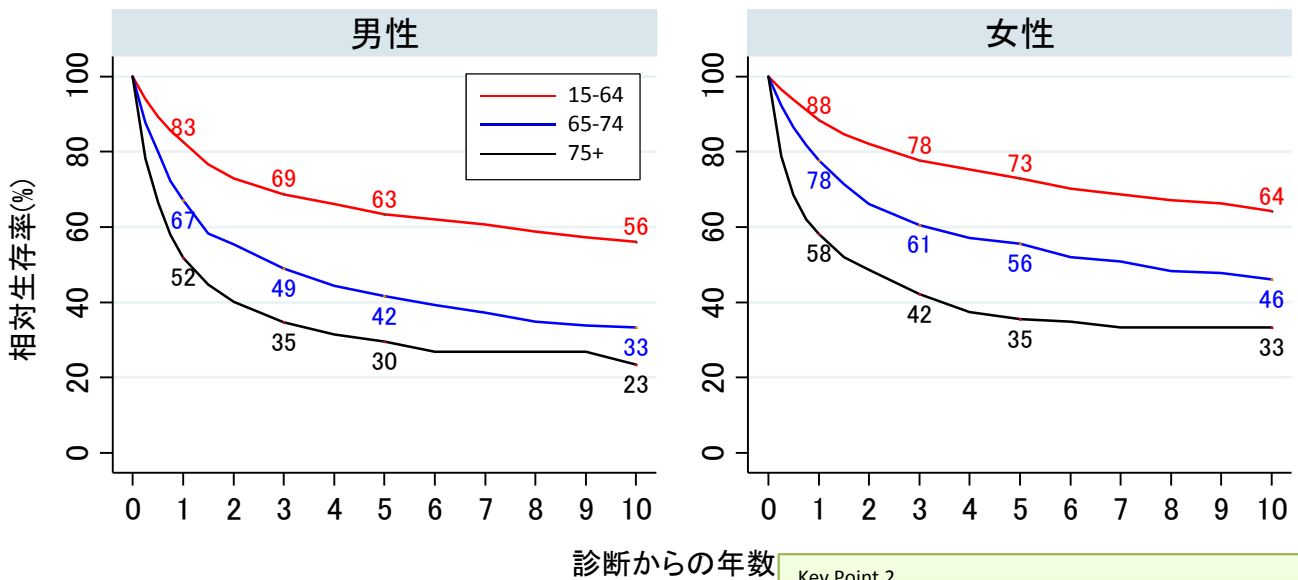
### 10年相対生存率

全患者



Key Point 1  
女性のほうが男性に比べ、相対生存率が良い。男女とも徐々に相対生存率が上昇しているが、上昇の割合は女性のほうが男性よりもやや大きい。

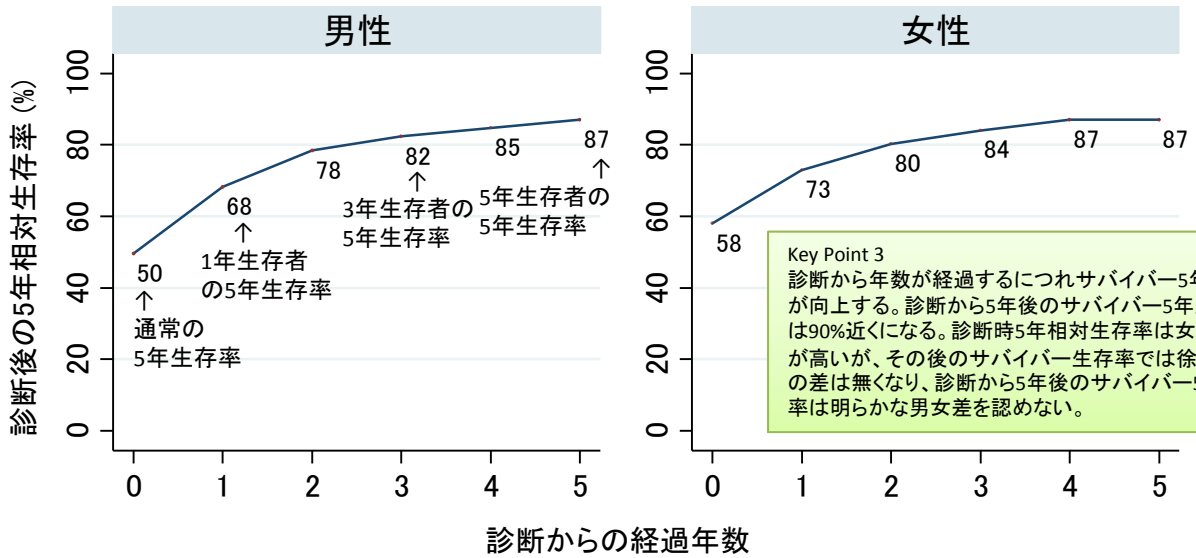
### 年齢階級別 (2002-2006年のperiod analysisによる生存率)



Key Point 2  
年齢階級の生存率では64歳以下の相対生存率が高い。各年齢階級の生存率の差ははっきりしており、どの年齢階級でも女性のほうが男性よりも相対生存率が高い。

# サバイバー5年相対生存率

全患者



年齢階級別

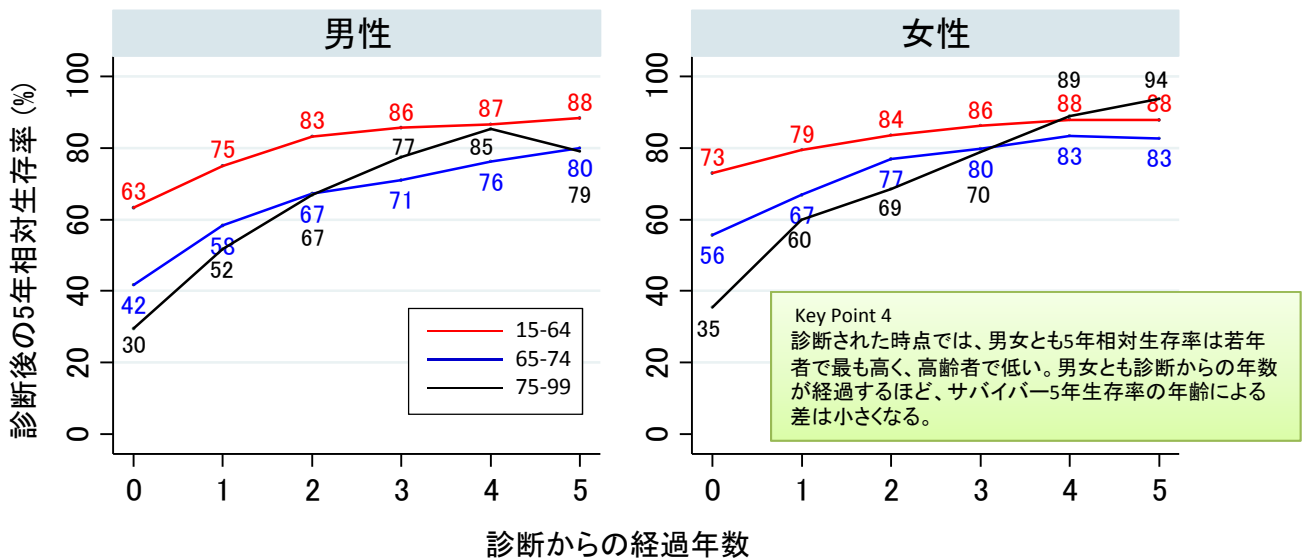


表1. 解析対象者

		Total		1993-1997		1998-2001		2002-2006		2002-2006 (period)	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
男性	全患者	10,381	100.0	3,053	100.0	2,911	100.0	4,417	100.0	4,577	100.0
	年齢階級別										
	15-64	4,802	46.3	1,600	52.4	1,375	47.2	1,827	41.4	1,904	41.6
	65-74	3,140	30.2	852	27.9	923	31.7	1,365	30.9	1,413	30.9
	75-99	2,439	23.5	601	19.7	613	21.1	1,225	27.7	1,260	27.5
女性	全患者	8,461	100.0	2,329	100.0	2,366	100.0	3,766	100.0	3,925	100.0
	年齢階級別										
	15-64	3,620	42.8	1,103	47.4	1,045	44.2	1,472	39.1	1,552	39.5
	65-74	2,272	26.9	605	26.0	645	27.3	1,022	27.1	1,063	27.1
	75-99	2,569	30.4	621	26.7	676	28.6	1,272	33.8	1,310	33.4

表2. 1, 3, 5, 10年相対生存率(全患者:診断時期別、Period法:年齢階級別進行度別)

		1年相対生存率		3年相対生存率		5年相対生存率		10年相対生存率		
		RS	95%CI	RS	95%CI	RS	95%CI	RS	95%CI	
男性	1993-1997年	全患者	67.1	[65.3-68.8]	50.4	[48.5-52.3]	44.7	[42.7-46.6]	38.3	[36.2-40.5]
	1998-2001年		68.0	[66.1-69.7]	52.7	[50.7-54.6]	47.0	[44.9-49.0]	40.5	[38.3-42.7]
	2002-2006年		70.8	[69.3-72.2]	56.4	[54.7-58.0]	52.5	[50.7-54.2]	-	-
	2002-2006年(Period法)		70.3	[68.8-71.7]	55.0	[53.2-56.6]	49.6	[47.8-51.3]	43.1	[41.0-45.1]
	年齢階級別									
	15-64		82.6	[80.7-84.4]	68.8	[66.4-71.0]	63.4	[60.9-65.8]	56.1	[53.2-58.8]
	65-74		67.1	[64.4-69.7]	48.9	[45.9-51.9]	41.7	[38.5-44.8]	33.3	[29.3-37.4]
	75-99		51.9	[48.7-55.0]	34.7	[31.2-38.1]	29.5	[25.7-33.5]	23.4	[16.9-30.4]
女性	1993-1997	全患者	68.2	[66.2-70.1]	53.6	[51.4-55.7]	49.1	[46.9-51.3]	43.2	[40.8-45.5]
	1998-2001		72.9	[71.0-74.8]	60.2	[58.1-62.3]	55.4	[53.1-57.6]	48.7	[46.3-51.0]
	2002-2006		76.4	[74.9-77.8]	64.2	[62.5-65.8]	60.5	[58.7-62.2]	-	-
	2002-2006(Period法)		76.2	[74.7-77.7]	62.8	[61.0-64.5]	58.1	[56.2-59.9]	50.6	[48.4-52.7]
	年齢階級別									
	15-64		88.5	[86.6-90.0]	77.7	[75.4-79.9]	73.0	[70.4-75.4]	64.2	[61.1-67.1]
	65-74		77.8	[74.9-80.3]	60.5	[57.1-63.8]	55.7	[52.0-59.1]	46.1	[41.4-50.6]
	75-99		58.2	[55.1-61.1]	42.2	[38.8-45.5]	35.5	[31.8-39.2]	33.3	[27.4-39.3]

表3. サバイバー5年相対生存率 (Conditional five-year survival)

		診断からの年数		0年		1年		2年		3年		4年		5年	
		RS	95%CI	RS	95%CI	RS	95%CI	RS	95%CI	RS	95%CI	RS	95%CI		
男性	全患者	49.6	[46.9-52.2]	68.3	[65.7-70.7]	78.4	[76.0-80.6]	82.3	[79.7-84.6]	84.8	[82.0-87.1]	86.9	[84.0-89.4]		
	年齢階級別														
	15-64	63.4	[59.6-67.0]	75.1	[72.0-77.9]	83.3	[80.6-85.6]	85.7	[82.9-88.1]	86.6	[83.6-89.1]	88.4	[85.2-90.9]		
	65-74	41.7	[37.1-46.2]	58.4	[53.5-63.0]	67.3	[62.0-72.1]	71.1	[64.8-76.5]	76.3	[69.0-82.1]	80	[71.1-86.4]		
	75-99	29.5	[24.4-34.8]	51.7	[43.4-59.4]	66.9	[55.4-76.1]	77.4	[61.4-87.4]	85.4	[61.6-95.0]	79.2	[49.2-92.6]		
女性	全患者	58.1	[55.2-60.8]	73.0	[70.5-75.3]	80.2	[77.9-82.2]	84.1	[81.6-86.2]	87.0	[84.5-89.2]	87.1	[84.4-89.4]		
	年齢階級別														
	15-64	73.0	[69.1-76.5]	79.5	[76.5-82.1]	83.6	[80.9-86.0]	86.3	[83.5-88.6]	88.0	[85.1-90.3]	87.9	[84.9-90.4]		
	65-74	55.7	[50.3-60.7]	67.0	[62.0-71.5]	77.0	[72.1-81.1]	79.9	[74.3-84.4]	83.4	[77.1-88.1]	82.7	[75.3-88.1]		
	75-99	35.5	[30.5-40.5]	60.0	[53.2-66.2]	68.6	[60.2-75.5]	79.0	[67.7-86.7]	88.9	[70.5-96.1]	93.8	[53.5-99.3]		

## Key Point 解説

愛知県がんセンター研究所 疫学・予防部 千原 大

### 10年相対生存率

#### Key Point 1

女性のほうが男性に比べ、相対生存率が良い。男女とも徐々に相対生存率が上昇しているが、上昇の度合いは女性のほうが男性よりもやや大きい。

悪性リンパ腫は血液細胞であるリンパ球が腫瘍化する疾患の総称である。病態、予後の異なる数十のリンパ腫を合わせた結果であり、個々のリンパ腫がこのグラフに当てはまるわけではない。

悪性リンパ腫は大きくホジキンリンパ腫、B細胞性リンパ腫、T細胞性リンパ腫に分けられるが、最も罹患率の高い疾患はB細胞性リンパ腫である。日本で診断される各種リンパ腫は、びまん性大細胞型B細胞リンパ腫が約5割を占め、次いで濾胞性リンパ腫、辺縁帯B細胞リンパ腫などであるが、全てB細胞性リンパ腫である<sup>1)</sup>。このB細胞性リンパ腫に非常に有効性の高いリツキシマブという薬剤が2001年に認可された。B細胞性リンパ腫は悪性リンパ腫全体の70%程度を占めるため、2002年以降の生存率が上昇しているのは主にこの薬剤によるものではないかと推測される。米国では同様の研究により、1990-92年の期間と2002-04年の期間を比較したところ、非ホジキンリンパ腫全体で約15%の相対生存率の上昇を認めており<sup>2)</sup>、このような研究を見てもリツキシマブの影響は大きいと考えられる。また、男女ともに1993-97年の期間より1998-2001年までの期間でも生存率が伸びているが、この上昇は悪性リンパ腫の診断時期が早くなったことが一つの可能性として挙げられる。B細胞性リンパ腫の一つである濾胞性リンパ腫などは非常に緩徐に進行するため、以前は早期に受診せずに放置されていること

もあった。悪性リンパ腫という疾患の認知度が上昇したことや一般検診、診察におけるCTや超音波検査などの普及から疾患を早期に診断できるようになった結果、診断からの生存期間が伸びているように見えている可能性も考えられる。

#### Key Point 2

年齢階級別の生存率では64歳以下の相対生存率が高い。各年齢階級別の生存率の差がはっきりしており、どの年齢階級でも女性のほうが男性よりも相対生存率が高い。

悪性リンパ腫に対する治療は主に抗がん剤による化学療法であり、移植治療の占める割合が白血病に比べ少ない。ただし濾胞性リンパ腫などを代表に悪性リンパ腫は再発を繰り返すような疾患が多く、その場合化学療法への耐性が非常に大きな問題になってくる。若年者のほうが度重なる化学療法による骨髄毒性、糖尿病や高血圧などの併存症等の問題を含め、臓器機能が治療経過中に維持されていることが多く、有効な治療を継続して行いやすい。結果的に若年者のほうが生存率が高くなっていると考えられる。女性のほうが生存率が高い理由は不明だが、喫煙、飲酒など臓器機能障害にリスクのある生活習慣は男性に多くみられるため、女性のほうが併存疾患などが少ない可能性は考えられる。

### サバイバー5年相対生存率

#### Key Point 3

診断から年数が経過するにつれサバイバー5年生存率が向上する。診断から5年後のサバイバー5年生存率は90%近くになる。診断時5年相対生存

率は女性のほうが高いが、その後のサバイバー生存率では徐々にその差は無くなり、診断から5年後のサバイバー5年生存率は明らかな男女差を認めない。

悪性リンパ腫全体の診断時点での5年相対生存率は50%だが、3年生存者のその後の5年生存率は80%程度、5年生存者のその後の5年生存率は90%弱と次第に上昇する。悪性リンパ腫の中で最も罹患率の高いびまん性大細胞B細胞リンパ腫は化学療法により治癒が期待できる疾患であり、再発する場合多くは2年以内と言う報告がある。このような治癒が望める疾患での再発率は時間が経つにつれ減少していくため、その時点以降の5年相対生存率が上昇していくと考えられる。一般集団に比べそれでも低い原因は、悪性リンパ腫の中には濾胞性リンパ腫のような進行が緩徐ではあるが、治癒が期待できない疾患があり、5年、10年という時間で再燃してくるためと考えられる。診断時の5年相対生存率が女性の方がやや高い理由は、各種リンパ腫の罹患率における男女差や診断時の併存疾患の存在などが考えられる。マンツル細胞リンパ腫、バーキットリンパ腫、末梢性T細胞性リンパ腫などの治療が難しいリンパ腫では罹患率に明らかな男女差があり、男性にこのような難治性のリンパ腫の割合がやや高いことや、併存疾患が多く治療が難しかったことなどが男性における診断時の5年生存率を下げた可能性がある。

#### Key Point 4

診断された時点では、男女とも5年相対生存率は若年者で最も高く、高齢者で低い。男女とも診断からの年数が経過するほど、サバイバー5年生存率の年齢による差は小さくなる。

高齢者は診断時の5年生存率に示される通り診断から5年以上生存するのは非常に難しい (Key Point 2 参照)。よって診断後年数を経るにつれて

高齢者では若年者より生存している患者の割合が相対的に少なくなってくるため、その後のサバイバー5年生存率の値の信頼区間は広がっている。診断からの2~3年間の悪性リンパ腫による死亡における年齢差は大きいですが、他死因による死亡の影響を補正した相対生存率においては、診断から時間が経過するにつれ、年齢による影響が小さくなると考えられる。

#### 文献

- 1) Chihara D, Ito H, Matsuda T, et al. Differences in incidence and trends of haematological malignancies in Japan and the United States. *Br J Haematol* 2014; 164(4): 536-45.
- 2) Pulte D, Gondos A, Brenner H. Ongoing improvement in outcomes for patients diagnosed as having Non-Hodgkin lymphoma from the 1990s to the early 21st century. *Arch Intern Med* 2008; 168(5): 469-76.